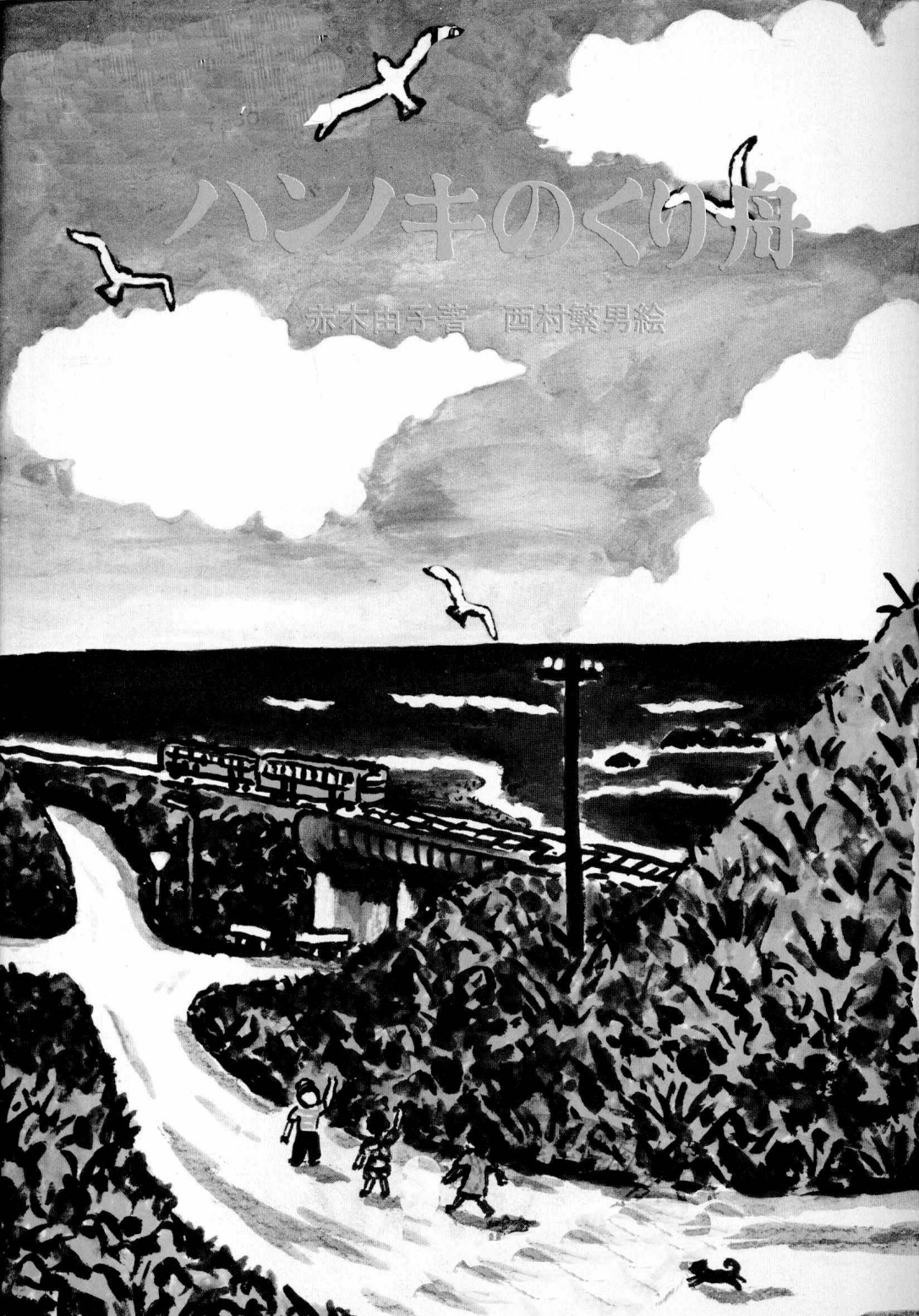
ハンノキのくり舟

赤木由子著　西村繁男絵


ハンノキのくり舟
赤木由子著　西村繁男絵

913.6 赤木由子
ハンノキのくり舟
新日本出版社　1976
174 p　21.5㎝（新日本少年少女の文学5）

赤木由子（あかぎ よしこ）

1927年，山形県鶴岡市に生まれる。児童文化の会，新作家協会，日本児童文学者協会会員。『はだかの天使』（新日本出版社）で，児童福祉文化奨励賞を受賞。ほかに，『柳のわたとぶ国』（理論社），『赤毛のブン屋の仲間たち』（新日本出版社），『夏草と銃声』（偕成社），『美しいぼくらの手』（ポプラ社），『ひまわり愛の花』（金の星社）など。

西村繁男（にしむら しげお）

1947年，高知県に生まれる。中央大学卒。児童出版美術家連盟会員。
主な作品に，『くずのはやまのきつね』（福音館），『サックサックは鎌のうた』（童心社），『スモッグの季節』（理論社）などの絵がある。

新日本少年少女の文学5　ハンノキのくり舟

1976年10月25日　第1刷発行

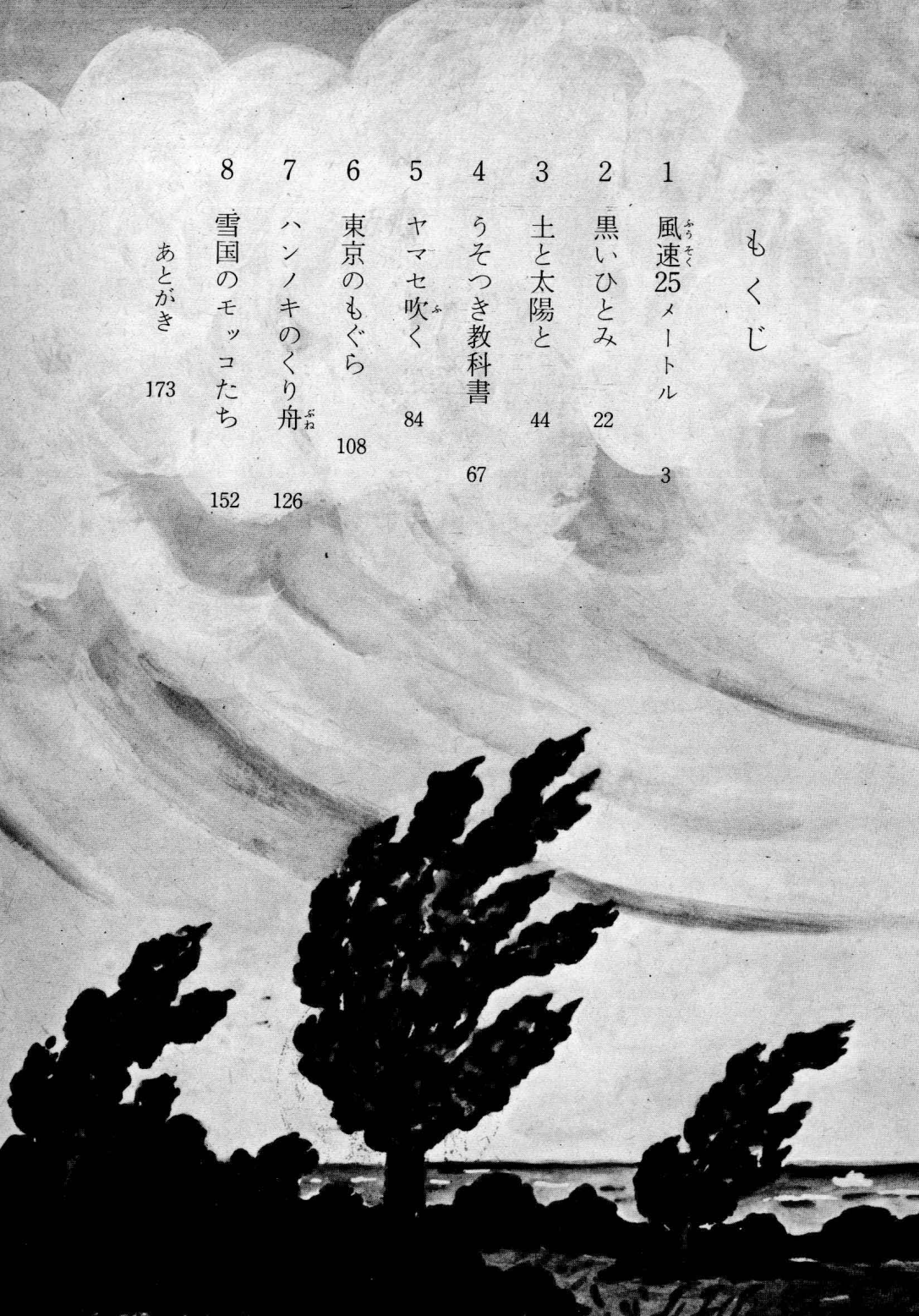
著者　赤木由子
画家　西村繁男
発行者　松宮龍起

郵便番号　112　東京都文京区大塚3－3－1
発行所　株式会社　新日本出版社
電話　東京　（945）8511　振替　東京3－13681
印刷・壮光舎印刷株式会社　製本・古賀製本株式会社

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

もくじ

1 風速25メートル 3
2 黒いひとみ 22
3 土と太陽と 44
4 うそつき教科書 67
5 ヤマセ吹く 84
6 東京のもぐら 108
7 ハンノキのくり舟 126
8 雪国のモッコたち 152
あとがき 173

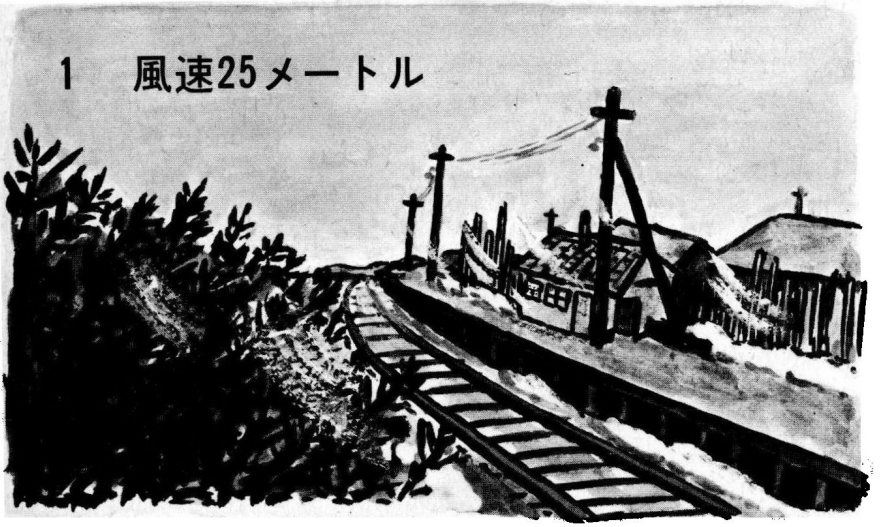


装丁・さし絵

西村繁男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1　風速25メートル



時計が、午後二時をまわった。

「そろそろ、いくびし（いこうや）」

せつ子の父が、黒いボストンバッグを持って、土間におりる。母が、さゆりのかみの毛を、手でかきわけて、いいきかせる。

「それじゃ、さゆり。いい子しててな。あと五つねると、一年生だし、しっかり勉強しねば、まいねよ（だめだよ）」

「ん」

母ににて、さゆりは色が白い。ふたえまぶたの目を、くりくりさせてうなずく。せつ子は、父ににている。色が浅黒く、ひとえまぶただ。

母が、サクランボの玉かざりがついたピンどめを、口にもっていき、前歯でピンの足をひろげて、さゆりのかみの毛にとめる。

ばさまが、石油ストーブの火を消した。ばさまとせつ子は、母の荷物を持った。そろって家をでる。

強い風だ。家の横の道を、すぐ右へおれる。ほそく、まがりくねった道ばたに、雪が残っている。道の片がわに四本並んでいる柳の大木が、はだかの枝を、いっせいにヤマのほうへなびかせている。

せつ子のほそいからだが、強い風によろめく。

――柳も、ヒュー、ヒューて、泣いでら。

せつ子の両親は、もう八年ごし、年間をとおして、東京へでかせぎにいっている。一年に一度、新学期の前に、家に帰る。四、五日家にいて、すぐ、またでていく。

うしろから、声がとんでくる。

「せつ子ちゃんのとっちゃ、まってけれ」

幸子と、その両親が、どたどた追いかけてくる。幸子は、せつ子とおなじ学年で、四月から五年生になる。幸子親子は、そろって、からだががっしりして声も大きい。こいまゆまで親子三人、そっくりだ。

広い農道に出て左へいく。海があれている。海にむかって右がわに、雪をおいた、荒野のような休耕田がひろがる。せつ子の家の田だ。せつ子の両親が、こめつくりを休んで八年になる。雑草がはびこって、ハンノキが一本はえた。

見まいとしても、目が、田のほうへいく。ハンノキがひとをばかにしたように、枝をめちゃめちゃに、ふりまわしている。

せつ子の両親が、そっと、ため息をつく。幸子の父がどなる。

「なんぼ、さびい（寒い）んだ」

オーバーの前をかきあわせて、
「カソセの名物だば、風と雨だァ。雨ときた日にゃ、まっすぐ降ることしらねじ。いつだって、よごなぐりだァ」
幸子の母が、投げやりにいう。
「いづになったら、でかせぎさいがねくてすむんだか。でかせぎのヨコヅナ、おらほの西つがるだってな」
幸子の家は、父だけが、でかせぎにいく。
ベコ丘のわきの、坂の上にきた。あお黒い海が、いっぱいにひろがり、風がいちだんと強くなる。幸子が、父をよびとめる。ふりむいた父のくびすじに、しがみつく。チュッと、口をつけていう。
「とっちゃ、だれかとけんかしたり、けがをしたら、まいねよ」
みんなが笑う。幸子の父がうれしそうに肩をゆする。せつ子は、一人で赤くなる。せつ子も、父も母もすきだ。しかし、幸子のまねはできない。
ベコ丘のほそい道を、のっぽのテッヤが走ってくる。息をきらして、そばへきた。油紙に包んだものを、せつ子と幸子の父にわたす。ぺこんと、あたまをさげて、
「ミガキニシンだ。おいの、とっちゃ、みんなによろしくって」
「そんなごと、さねくてもいいのに」
幸子が、両腕を、さっとよこにひろげる。
「みんな、ちょっとまって」
幸子が、口のわきに両手をあてがう。はりつめた高い声を、海にむけてはりあげる。

ぼうぼうとほえる、風と波の音のあいまを、その声が、うみねこのさけびのように、ぬっていく。

タ――　ラララ――　ラ――ラララ――

ツ――　ララ――

トランペットのものまねだ。どこから、そんな声がでるのかと、みんな、あきれる。幸子がいう。

「いまのトランペットは、とっちゃだぢを、はげましたんだ」

ガヤガヤと笑いながら、急な坂をおりていく。坂をおりきって、砂丘をこえる。波うちぎわに、小屋がある。五能線の無人駅の一つ、風合瀬駅だ。

国鉄五能線は、秋田県の東能代から、青森県の五所川原の先まで、日本海の海岸にそって走っている。赤字だというので、沿線の駅がつぎつぎに、無人駅になっていった。カソセは、駅の建物、そのものがない。乗客は、汽車にのってから、キップを買う。

「う、砂つぶいてえこと」

砂をまきあげる風で、目をあけていられない。待合室がわりの小屋に、もう、ひとがいっぱいつめかけている。

「もっと、つめてけれ」

小屋のなかにも、砂がつもっている。こわれたままの窓から、砂がはいってくる。たばこの煙がたちこめて、みんな、どなるような大声で、しゃべっている。

せつ子の村は、村じゅうの父や母たちが、七人、十人と、くみをつくって、東京や、川崎、千葉、横浜へと、でかせぎにいっている。せつ子の両親を中心にした仲間は、九人。東京のオギクボにある、川原施設工事という会社ではたらいている。一行九人のなかには、七十才になる、ミノルのじさまもいる。

黒っぽいオーバーがひしめくなかに、だいだい色の毛糸のマフラーをかぶった、あやがいる。あやは色が白くて、大柄なので、どこにいても、人目にたつ。せつ子のしんせきで、農家のあととり娘だ。あやは、見送りにきて、みんなに、「でかせぎをやめよう」と、くいさがっている。性質がからっとしているので、口がわるくても、にくまれない。幸子、ミノル、せつ子、あやと、みんな、吉村という名字だ。

あやがいう。

「なあ、とっちゃだぢ、来年から、こめ、つくるべよ。家族はなれてくらすのだっきゃ、ぜったい、よくねえてば」

おじさんたちが、笑いながらいいかえす。

「だ（だれが）、すきで、でかせぎにいくもんだば。政府がこめつくるなって、いうから、やめだんだ」

「そだよ、あや。百姓だぢ、だまされてばかり、きたでねが。でかせぎで、現金かせげるとき、かせいでおかねば、かえって、村じゅうがくびつりだァ」

あやが、うらめしそうに、見まわす。

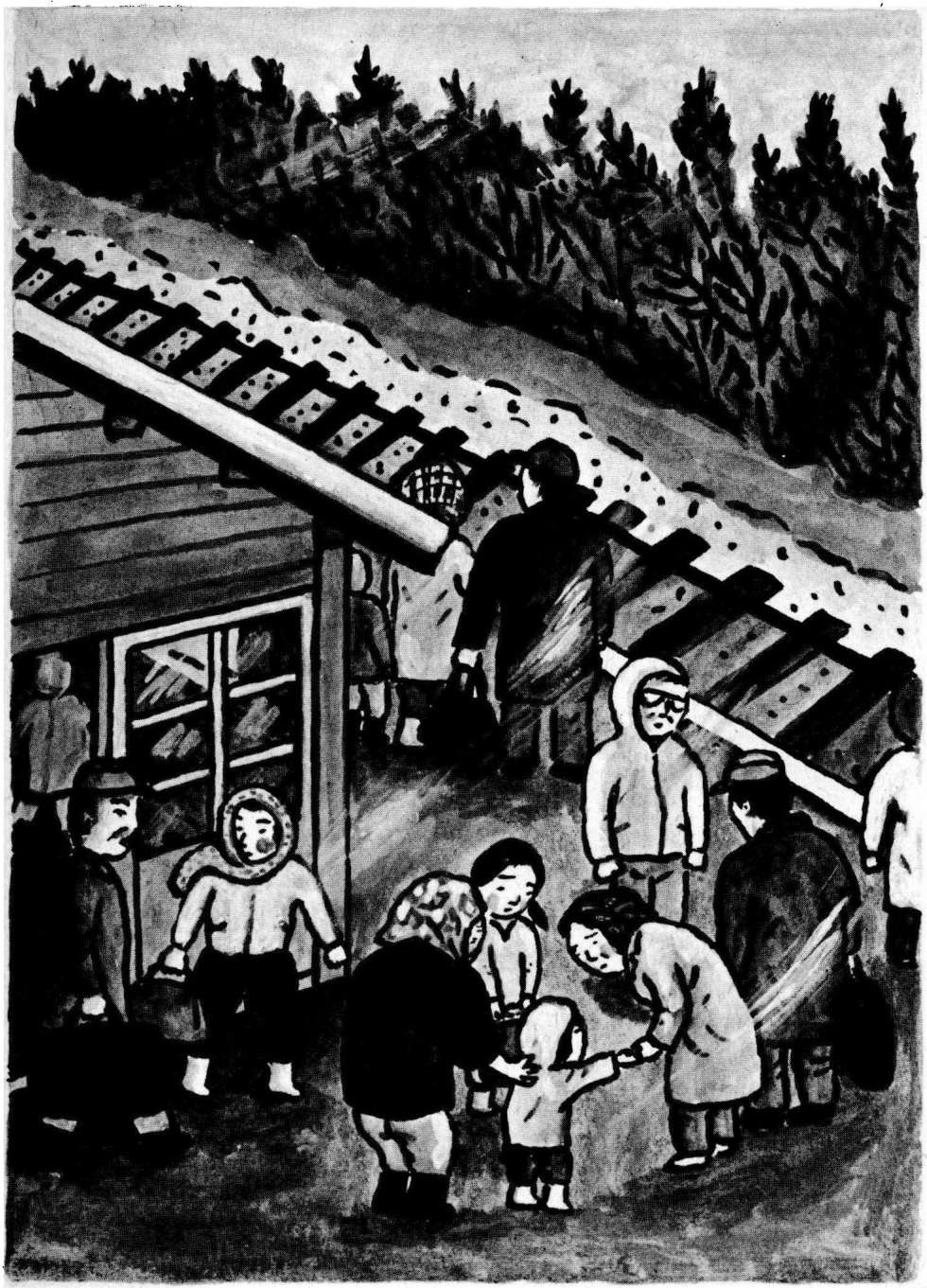
「したども、日本は、食糧から、牛や豚のエサまで、ほとんどアメリカから輸入してるっきゃ。この

ままでいったら、日本の農業はどうなるんだ」
おじさんたちが、いやなかおをする。幸子の父が、わざとふざけてみせる。
「あや。そう、わめくな。東京さいって、おめのムコさん、みつけてくるからよ」
どっと、笑い声があがる。あやが、べそをかく。
小屋のいりぐちがあいた。せつ子たちの担任だった、高田善次先生と、若い野原和男先生が、はいってきた。父たちが、先生をとりかこむ。
「先生、今年もハア、わらはど(子どもたち)、たのみしア。悪いことしたら、じぶんの子と思って、しかってけれ」
父や母たちには、先生だけが頼りなのだ。みんな、おなじことをいって、先生の腕をつかむ。
背の高い、高田先生が「ええ、ええ」と、一人、一人にうなずく。
幸子の父が、ずけずけいう。
「先生、学校の教育も、教科書どおり、教えてたらまいね(だめだ)。弱肉強食の世のなかだア。百姓が、生き残れる道を、教えてほしいもんだて」
みんな、内心、ひやりとした。高田先生は幸子の父をみつめて、
「んだ」
と、まじめな目の色でこたえる。
だれかが「この風だば、汽車、こねがもしらねな」と、いった。べつのひとが、あざ笑う。
「くるわけねえべ。瞬間風速二十五メートルで、汽車コ、ぱたっととまるんだもの」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「瞬間風速二十五メートルだっきゃ、年じゅう、ふいてら」
「そのくせ、汽車こねえとも、おくれるとも、なあも、知らせてくれねだし」
高田先生が、長いかみの毛を、指でかきあげる。
「学校でも、そのことで困ってるんだ。冬の、びゅうびゅうと、ふぶくなかで、中学生だち、この小屋で、なん時間て、ふるえてまっているのに、なにも知らせてくれない……」
父や母たちが、肩をよせてうなずく。高田先生がつづける。
「しかも、フカウラからカソセに帰る生徒は、下り弘前いきの、十四時五十一分にのらねばならない。クラブ活動はできねし、授業も五十分授業と、定められているのに、四十五分にちぢめているのせ」
ため息が高まる。若い野原先生がいう。
「とっちゃだぢ、家さいねえと、学校ぎらいの子がふえて……。なんとかさねば」
せつ子の母が、はじめて口をきいた。
「むかしはカソセにも中学校、あったのに、どうして、学校統合なんか、やるんだろうか」
風が、小屋をゆるがした。むかしは、せつ子たちの小学校のとなりに、中学校があった。学校の統合で、生徒数のすくない、カソセ、オイラセ、トドロキの中学校が廃校になった。そこの中学生は、深浦町の中学校に通っている。
小屋のすみで、せつ子たちは、かおを見あわせる。幸子がいう。
「わも、いまに、学校ぎらいの不良になるんでねべか。一年じゅう、とっちゃとはなれているし」
テツヤも、ゆううつなかおをする。

「中学生になるのも、すぐだな。だからよ、おらだち、いまのうちからうんと親友になっておくべ」
幸子が、口をつきだす。
「テツヤさんなんか、なんも心配ないべ」
テツヤの両親は、農業をやめて、村の人、二十人と、肉牛の共同飼育をやっている。
小屋の外で、だれかが大声をあげる。
「ひゃあ、ドッテンシタジャ(びっくりした)。汽車、一時間おくれただけで。ノタコラ、ノタコラ、きたじゃあ」
小屋の人びとの、かおがひきしまる。高田先生と、野原先生をぎっしり、とりまく。
「先生、わらはど、たのみし」
高田先生が、せつ子の父に、紙きれをわたす。
「友一くんのとっちゃのいどころ、探せたら頼みしァ。友一くん、四月から中学生になるし、たか子ちゃんは、まだ、二年生だし」
せつ子の父が、紙きれに目をとおして、胸のポケットにしまいこむ。
「きた、きた」
みんな、小屋の外にでた。海にむかって左ての海岸に、ジーゼルカーが姿をあらわした。下りの、弘前いきだ。ジーゼルカーのことを、みんなは、いまでも汽車とよんでいる。
東京へいくのには、いったん西つがる平野を北上して、五所川原から川部へ、つがる富士とよばれる岩木山を右にみながら青森へでる。青森から東北本線にのりかえて、上野へむかう。



二輛連結の汽車が、小屋の前でとまる。父たちがのりこんだ。汽車はすいている。父たちは、窓をあけてからだをのりだす。

さゆりがとびだした。

「あっちゃ（母さん）、わもいく」

ばさまがびっくりして、つかまえた。さゆりが泣いてあばれる。母のかおが、くしゃくしゃにゆがんだ。手をのばして、

「さゆり、いい子になって、まってれ」

汽車が発車する。母がさけぶ。

「ばさまア、せつ子オ、さゆりをたのみし」

ほかのひとも、それぞれに、からだに気をつけてと、よびかわす。窓からでているたくさんのかおが「先生、先生、たのみし」と、声をしぼる。

せつ子は涙がでた。毎年、両親を送りだしているのに、涙がでたのは、はじめてだ。

たくさんの声が、風にとばされる。汽車がかたむきながら、トリイザキの岬のかげにかくれる。見送りの人びとの声がやみ、ほうっとためいきをつく。波のさけび、風のさけびが、あたりを占領する。

泣いているさゆりを、ばさまがおぶった。みんなで、さゆりをなだめる。ぞろぞろと、砂丘をこえてかえっていく。さゆりは泣きやまない。

「へんだこと。さゆりちゃん」

と、あやがいう。

「いままで泣いたことねえのに」

高田先生がこたえる。

「一年生にあがるときは、子ども心に、心配ごとが、わったどふえるんだな」

砂丘をこえて、ベコ丘のわきの坂にさしかかる。ゆく手に、白く雪をいただいた飯盛山や、国有林の山やまが、のしかかるようにそびえている。つがる富士の岩木山は、国有林の高い峰にさえぎられて、ここからは見えない。

さゆりは、ばさまの、ゆったりした背なかに、かおをつけて泣いている。

「ばさまの生まれたどこは」と、高田先生が、話しかける。「十三の近くのトミヤチだったね。あっちは、腰きり田で、こめつくったそだね」

ばさまが、おだやかな笑顔をむける。

「トミヤチや、車力、十三のあたりは、ヤチ（湿地帯）だべし。どろ田、はいまわって、腰までつかったもんだ」

坂をのぼりきって、農道にでる。

あやが、だいだい色の毛糸のマフラーから、くっきりと大きな目をのぞかせる。

「わだ、うめえこめつくろうって、がんばってるのにな」

せつ子が、肩で息をして、あたりを眺める。

――ばほらど（とりどころのない）、さみしい眺めだ。

農道のわかれ道にきた。ばさまが立ちどまって、みんなにあたまをさげる。

「先生、あやさん、さびいとこを、どうもありがと、ございました」
「なあも、なも」
先生や、ミノルたちは、そのままっすぐ、なだらかな坂道をあがっていく。あやは、左のほうへいく。テッヤは、せつ子の家によっていくことにした。
せつ子たちは、右の小道にはいる。そのあたりは、十軒ほどの家がかたまってたっている。柳の木の下をとおりすぎると、むこうに、友一の姿が見えた。ソリに、いもうとのたか子をのせて、どろまじりの雪の上を、ひっぱっている。幸子が、手をあげて声をかける。
「友一さん、せつ子さんの家で、あそばねが」
友一がふりむいた。すっと、じぶんの家の庭にはいった。それきり、でてこない。友一の上着は、あちこちやぶれて、袖がみじかくなっている。幸子の母が、かおをしかめる。
「あの子だち、どうなるんだろ。かわいそうにのよ」
友一の父は、でかせぎにでたまま、行方不明になった。母は、アジガ沢の食堂へ、はたらきにでた。その母親も、先月から、家にもどっていない。「男できて、逃げた」という、うわさだ。
せつ子は、家にはいろうとして、二階の、出窓のあるじぶんの部屋を見あげる。幸子も見あげて、
「せつ子ちゃんは、あの出窓のとこで本よむの、気持ちよいべな。わどこは、とっちゃ、けがばっかししして、ちっとも、ジェンコ（おかね）、残らねはで、家など、つくらいねじ。友一さんどこよりは、いいどもせ」
家にはいった。ばさまが、ストーブのそばのソファーに、さゆりをおろす。さゆりが、足をばたば

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com